

事例

「農のある暮らし」から食や自然の大切さを学ぶ (第6回食育活動表彰 農林水産大臣賞受賞)

有限会社諏訪野 ^{すわの}ファーム・インさぎ山 (埼玉県)

ファーム・インさぎ山では、「農のある暮らし」をテーマに食や自然の大切さを学ぶ農業体験を行い、環境との共存・共生を目指す食育の活動に取り組んでいます。昔から受け継がれてきた農家の持つ知恵や技術を次世代に継承するため、未就学児から高齢者まで、幅広い世代を対象に広く活動を行っています。

当園では、自然のサイクルに合わせて1年間の体験の計画を立てています。春はジャガイモの植え付けや田植を体験し、冬は落ち葉を集めて堆肥の学習をします。そのほかにも、刈り取ったわらを燃料にして、かまどでごはんを炊いたり、その灰を肥料にしたりするなど、循環型の農業がSDGsにつながることで実感できるような、様々な体験を行っています。食育体験では、参加者は野菜の収穫から調理、食事まで一連の流れを通し、旬の採れたての野菜のおいしさを知ることができます。

また、企業と連携し、障害のある人に対して農業体験の場を提供しています。ゴムボートやブルーシートを活用し、車椅子の人も水田に入って田植を行います。障害の有無にかかわらず、共に土いじりや作物作りの楽しさを体験することで、人々の交流の場となっています。さらに、埼玉県警少年課と連携し、少年たちの居場所づくりや立ち直り支援の場を提供しています。農業体験を通して自信を持ってもらい社会復帰につなげるなど、社会福祉にも貢献しています。

新型コロナウイルス感染症の影響下においても、屋外で密を避けられる農園という場を生かして、保育所や学校などの団体の受入を積極的行いました。さらに、SNSを活用し、旬の野菜を使った料理、普段使いの郷土料理を発信したり、自然や農業を題材とした科学実験や農家生活に関するオンライン講座等を実施したりするなど、多くの方々に参加いただきました。

これからも、農村文化を発信し、農業体験を通した食・教育・環境・福祉等の社会の様々な課題の解決の一助となるよう、「食育は農業体験から」の活動を継続、発展させていきたいと考えます。



ゴムボートでの田植体験



保育園児の収穫体験

第5章

生産者と消費者との交流の促進、環境と調和のとれた農林漁業の活性化等